ラッツォクの灯

原作　熊谷達也『希望の海 仙河海叙景』
脚色・演出　赤澤ムック（黒色綺譚カナリア派）

登場人物・配役

役者一　翔平（アルバイト勤務。瑞希の兄）
守一（高齢夫）　守（会社員。清子と守一の息子）
美香（パート勤務。守の妻）　職員（介護施設職員）　ト書き1

役者二　瑞希（会社員。翔平の妹）　玲奈（大学生。清子と守一の孫）
隣家（中高年の主婦）　ト書き2

役者三　幸子（派遣社員）　清子（高齢妻）　ト書き3

役者四　希（中年。ランナーの女性）

この戯曲は、原作収録作品の「ラッツォクの灯」「永久なる湊」「リアスのランナー」「希望のランナー」から、登場人物やエピソードを拾いあげ、新たに紡いだものである。

上演記録

二〇一七年十一月二十三日

宮城県石巻市ガルバナイズギャラリー（第二回いしのまき演劇祭）

二〇一八年七月二十八日

宮城県気仙沼市 K-port

初演、再演共に、芝原弘主宰『コマイぬ』公演。

上演時の配役

芝原弘（役者一）　升ノゾミ（役者二）　牛水里美（役者三）　山下恵（役者四）

四名ともに劇団『黒色綺譚カナリア派』所属。

第一場　オープニング

二〇一七年、十一月。夜。

海を感じる屋外に、翔平が一人佇んでいる。

翔平　それはきっと、あいつのためじゃなく、俺のために必要な時間だったんだ。その短くも、長い長い時を経て、そこからスタートだ。俺が物語を始めるための、物語だったんだ。『ラッツォクの灯』…が、灯る頃、俺はいつも、今はもう遠い海を思い浮かべて、ありがとうとあいつに言う。いつかまた会えた時に、俺は素直にそう言えるだろうか。そのための予行練習かもしれないな。

第二場　ラッツォク前編

幸子が登場する。

二〇一一年二月。昼。公園。幼稚園児らの声がすると良い。

幸子　ずるいよね。

翔平　そうだね。

幸子　私もう四年目なのにさ。大卒の社員にアゴで使われてさ。派遣に人権はないの？

翔平の携帯に着信（バイブレーション）があるが、翔平は構わず。

翔平　んー。幸子、頑張ってるのにな。

幸子　でも、こういう時だけは、両親ともあんまり家にいてくれなくて助かるかも。

翔平　（着信の相手をチラと確認し）そっか。

幸子　うん。

翔平　……。

幸子　…電話でないの？

翔平　え、あぁ。

幸子　さっきからずっと鳴ってるみたいだけど。

翔平　うん…。大丈夫。

幸子　誰から？

翔平　（モゴモゴと）

幸子　男の人？

翔平　（首を横に振り）

幸子　じゃあ女の子か。私の前じゃ出られない女の子だね。
翔平　違うよ、瑞希。
幸子　えー、瑞希ちゃん！　出たらいいじゃない、喋りたい！
翔平　ていうか、さらっと誘導尋問すんのやめてよね。引っかかっちゃったじゃん。幸子のそういうとこ、たまに恐ろしくなるよ。
幸子　（笑って）おばさんからかと思った。瑞希ちゃんから電話なんて珍しいじゃない、出なよ。出てあげなよ。
翔平　別に。用があるならメールでもいいし…。
幸子　じゃあ私が喋る。貸して。
翔平　やだよ。
幸子　じゃあ、出て。
翔平　……。
幸子　ねえねえ。
翔平　もー、わかったから。
幸子　（笑顔）向こう行ってるね。
翔平　…ありがと。
幸子　可愛い妹さんからの電話、すぐ切っちゃ駄目よ。
翔平　（わかったからと身振り）

翔平が、電話に出る。

翔平　どうした、珍しい。
瑞希　なんで。
翔平　用があるなら、家電にかけりゃいいじゃん。
瑞希　うん。
翔平　なんで俺の携帯？
瑞希　お兄ちゃんに用があるから。
翔平　…それでも家電でいいじゃん。
瑞希　お母さんにわざわざ取り次いでもらうの面倒でしょ？
翔平　お前の声聞いたら、喜ぶだろ。
瑞希　お母さんとはメールしてるもん。お兄ちゃんよりよっぽど実家事情詳しいので、ご心配なく。
翔平　母さんメールしてんの？
瑞希　うん、絵文字とか使って、うちら世代には無い発想で。
翔平　若いなぁ。
瑞希　お兄ちゃんが年寄りじみてんだよ。

翔平　じゃ、俺にだってメールでよかったんじゃないの？
瑞希　なにが。
翔平　だから用件がさ。わざわざ電話じゃなくて。
瑞希　外は。
翔平　は。
瑞希　出てんの？　外。
翔平　出てるよ。
瑞希　どこ。
翔平　そこらへん。
瑞希　今は？　家？
翔平　外。
瑞希　なにしてんの。
翔平　…散歩。
瑞希　はー。働き盛りの男が。携帯代だってタダじゃないんだから。
翔平　働いてた頃の貯金で払ってる。え、なに、お前、俺に説教するためにわざわざ電話してきたの？
瑞希　違う。
翔平　じゃあなんだよ。
瑞希　私、結婚する。
翔平　お、おう。あー、ね、おめでとう。あれっ、えーと、相手はあのだよね、あの、職場の先輩の。
瑞希　うん。棚瀬さんと、籍入れようと思ってるんだ。
翔平　そうそう棚瀬さん。一緒に暮らしてどれくらいだっけ、半年くらい？
瑞希　こっち就職して四年目くらいからだから、もう一年かな。
翔平　一年か。あっという間だな。
瑞希　長いよ、一年。
翔平　そうかぁ？　まぁ確かに出会って二週間で結婚とかもあるし…って、え、もしかしてお前、えっ、そういう理由？
瑞希　なに？
翔平　結婚急がなきゃいけない理由とかある感じのやつ。
瑞希　ないよ。子供は、私の今の仕事が落ち着いてから考えようって決めてる。
翔平　そっかー。
瑞希　そうだよ。
翔平　いや俺、伯父さんになるかと思って焦ったよー。
瑞希　そりゃ焦るよね。ねえ、お兄ちゃんが無職になったのも一年前だよ。
翔平　……。

瑞希　棚瀬さんも心配してんだよ。
翔平　恥ずかしいよな。
瑞希　そういう意味じゃなくて、心配してんだよ。お母さんも、幸子さんだって。
翔平　幸子関係ないだろ。
瑞希　あるでしょ、彼女なんだから。
翔平　バイトしてるし。
瑞希　コンビニでしょ？
翔平　悪いかよ。
瑞希　悪かないけど。お兄ちゃん、好きだったじゃん仕事。また探してみればいいじゃん。あの頃はちょうどいい求人なかったかもだけど、今ならあるかもしれないじゃん。前の職場みたいに、パワハラもモラハラもアルハラもない、普通のさ、健全な職場が待ってるかもしれないよ？
翔平　行ってみなきゃわかんないんだよ。職場の中なんて。
瑞希　だから行ってみればいいじゃんて。
翔平　やっぱり説教すんのに電話してきたんだな、お前。
瑞希　違うってば。今度、お母さんが結婚式で着た着物をもらいに二人で帰るから。そん時にちょっと紹介したい会社があって。
翔平　斡旋かよ。
瑞希　斡旋だよ。
翔平　…結婚式、どこでやんの。
瑞希　んー。地元で、とも思ったんだけど、やっぱり仕事関係とか友達とか、こっち出て来てる人が多いし、棚瀬さんの家族もこっちだから。
翔平　いいんじゃない。
瑞希　お兄ちゃんも出席するんだからね。
翔平　うん。…え。
瑞希　当たり前じゃん。
翔平　うん。…で、いつ戻ってくんの？
瑞希　来月の二週目の週末。土日のどっちかで食事会しようって話になってる。
翔平　早っ。
瑞希　三月って年度末で忙しいから、二人で休みとれるの、そこしかなかったんだ。式は五月。
翔平　お前は昔から、あれだな、段取りがいいというか、ちゃんとしてるっつか。
瑞希　逃げないでよね。
翔平　子供じゃないんだから。
瑞希　じゃあ、また近くなったら電話する。
翔平　おう。

瑞希　ごはん食べ終わった食器、水につけるくらいしなよね。
翔平　あー、もう母さんそんな愚痴お前に言ってんの？
瑞希　あはは。じゃあね。

電話をきる翔平。
缶ジュースを手に戻る幸子、翔平に渡し。

幸子　瑞希ちゃん、結婚するんだ。
翔平　（そう）だってさ。あ、替わればよかったね。
幸子　ううん、いい。私から連絡する。
翔平　（結婚の話が気まずい）
幸子　なに。
翔平　いや、なんでも…。
幸子　結婚かぁ。
翔平　（ますます気まずい）
幸子　やだな。心配しないの、お兄ちゃん。
翔平　え、あぁ。それは心配してないけど。棚瀬さんちゃんとしてるし。
幸子　きっと幸せになれるよ、瑞希ちゃん。
翔平　……。
幸子　あ、でも私は、うちの両親見てるから、他のどんな夫婦も幸せそうに見えるってのはあるわね。あれはまさに人生の墓場。二人とも教師だからって、そんなとこまでお手本見せてくれなくともいいのに。
翔平　お父さん帰ってるの？
幸子　母親の人が次から今の学校で教頭になるじゃない、忙しくしてるから、その隙にこっそり。寝てく時もあるけど、たいてい図書館に戻るって言って女のとこ。
翔平　そっか。
幸子　まだ離婚してくれた方が夢見れるな〜。って、そんな実家から出ないでいる私もどうかっていう話よね。もっとお給料いいとこないかな〜。今の派遣先いまいちなんだよね〜。
翔平　俺もこんなだしな。
幸子　こんな？
翔平　こんなだろ。
幸子　あ〜、なるほど。結婚の心配は瑞希ちゃんじゃなく、自分の方なのね。
翔平　大声出すなよ。
幸子　大声じゃないよ。
翔平　ほら、あそこで幼稚園児がポカンとしてるじゃん、ただでさえこんな平日の昼間

に公園でぼんやりしてる大人なんておかしいんだからさ。
幸子　翔平、私と結婚する気あるんだ。
翔平　そういうこと大きな声で言わないの。あぁ、ほら子供が珍しがって他の子呼んじゃってるだろ。
幸子　なんか幸せだね。
翔平　え、どういうこと。
幸子　未来を考えてくれてるから。
翔平　でも俺は。
幸子　贅沢しなくても、生きていけるじゃん。二人でいればさ。
翔平　幸子はさぁ、そういうとこいけないよ？
幸子　翔平に甘いとこ？
翔平　俺を過信してる。
幸子　だって翔平、前は私より稼いでたし、家事だって得意じゃん。
翔平　ちょっとの昔にしてたことが、いつも取り戻せるとは限らないよ。
幸子　さっきできたことが、今も簡単にできちゃ駄目？
翔平　かなわないな。
幸子　かなわなくていいよ。
翔平　（凝視してくる幼稚園児へ）こんにちは。
幸子　大好きだよ。
翔平　え？
幸子　（煙に巻き）可愛いね。
翔平　（自分か幼稚園児のことか分からず）あ、そうだね。
幸子　今年も、日記でいいかな。
翔平　誕生日プレゼント。
幸子　うん。

瑞希が登場し、翔平へ日記帳を渡す。
翔平は缶ジュースを幸子へ渡し、日記をめくる。

幸子　いつかきっと、翔平がしたため続けた文章は、翔平の力になってくれる。

幸子が見守り、立ち去ると、翔平のモノローグが始まる。

翔平　一年前に、恋人の幸子がくれた日記帳。俺が仕事を辞めて、ぼんやりとした時間が多くなり、その後ろめたさで彼女と会いにくくなっていた頃に、幸子は日記帳をくれた。私といない時間、なにを考えているか知りたいと、そう言って。それ

まで俺が働いていた場所は至極普通の職場だった。朝起きて、夜遅くまでラーメン屋の仕込みをしている両親を起こさないよう手早く身支度を済ませ、適当に前の晩買ったコンビニのパンを飲み込んで、満員電車が面倒だなと思いながら定時に会社へ向かい、その日のノルマをこなし、その月のノルマを考えて。毎日。昼の休憩はコンビニのおにぎりとカップラーメン。幸子のメールに返信をして、ちょっとニヤけたりして、野菜不足とか叱られつつ平和だった。なのに、ある日、僕は、なんてことない朝、いつものように電車に押し込まれて、俺の持っていた鞄がぶつかった隣の乗客に舌打ちされて、頭を下げて電車を降りた。気を取り直して次の電車を待つつもりだったのに、会社に行っても舌打ちされるんだよなぁって考えてたら、ふらっと、逆の方向の電車に乗っていたんだ。一駅過ぎて、冷や汗が出た。どうしよう、なんて言い訳をしよう。三駅過ぎた頃、そうだ父親が危篤だって事にすればいいと思いつき、午前中の遅刻は稼げるなと算段した。窓に映る景色を眺めてぼんやりした。しばらくして、あぁいつまでも会社に行きたくねえよなって目を閉じた。やんなきゃいけないのかな。…会社の前で自分のこと奮い立たせて、今までしてきた事を反省して、自分で自分を罵って、どう考えても筋の通ってない上司の怒鳴り声にハイハイ頭を下げて、お前はなんにも分かってないって叩かれて、こづかれて、馬鹿は馬鹿なりに素直に謝ればいいんだよと皆の笑いものにされて、……小さい頃から、育ててきてもらった全てを否定されるわけだよ。そんな場所に、たとえ月給十六万円が確約されてたって、本当に行かなきゃいけないのか？　行かなくてもいいだろ。

車内には日が照り、半分寝ちゃったおばあちゃんとか、何して生きてんだか分からないバンドマンみたいな同年代の男とかいてさ、でもすごくのんびりしてたんだ。ぽかぽかしてて、うつらうつら、俺も二度寝して、気付いたら駅名しか知らない場所にまで来てしまって。でもそれでいい気がした。どうして俺ばっか毎日、寝る時間を何時間とれるんだろとか、今日は怒鳴られなきゃいいな、コンビニじゃない飯が食いてえなって思わなきゃいけないんだろう。食えたよ、定食屋だって、ＯＬが行くようなパスタの店だって本当は。実家暮らしだから、月給全部昼飯代にしたって構わなかったんだよ本当はさ。でも、行っちゃいけない気がしたんだ。安月給だから少しでも貯蓄しなきゃいけない、俺を怒鳴ってこづく上司より良いランチを食べちゃいけない、時間があるなら仕事の成果をみせなきゃいけない、高校の頃の仲間たち、大学に受かって喜んでくれた先生、就職祝いの親の顔、みんなを裏切ることだけはしちゃいけないって思ってた…けど、疲れてさ。俺、そもそも、そんな器じゃなかったなって。会社から逆走する電車に乗りながら、残念でした俺はたいした人間じゃなかったんでーすって目をつぶると、泣けてきて。あんまり大声で泣くもんだから、俺の車両から人がいなくなってた。そこから二度と会社に行くことができなかった。今思うと、逆方向の電車

に乗れてよかった。そのまま線路に飛び込まず本当によかった。
中学ん時に好きだったバンドのポスターが貼りっぱなしになってる俺の部屋だけど、不愉快なものがない空間は居心地が良くてさ。刺激がない空間でじっと丸まってた。最初はのんきに構えてくれた両親もざわつきだして「こりゃ引きこもりってやつよ」、「もしかして鬱病じゃないか？」なんて揉め始めてるのも伝わった。けど、俺にはどうする事もできなかった。最初の何か月か食欲がなくて、それがよりいっそう両親にとって不安材料だったんだろうな。働かなくなったから、摂取カロリーが必要なくなっただけなんだけどさ。会社を訴えてやろうかなんて、親父、意気込んだりした時もあったけど、俺は別に普通にぐーたらしてるだけで、急に植物になっちゃったようなもんだから、成すすべがなくて、しばらくしたら普通に両親共に、普通の生活を、俺が立派だった頃と同じようにね、送りだした。両親はラーメン屋をやってる。目立ちはしないけど、安心できる店って感じのラーメン屋。俺もさ、脱サラしたのは親父の店を継ぐためですとか言えたらよかったんだけど、残念ながら興味なかったんだよな。やたら厚く切ったナルトは好きだったんだけどさ。外に出ると胸が詰まった。大の大人がさ、涙をこらえられなかった。なぜ自分が泣くのか理由は分からない。外に出ると涙が出る、それだけだ。幸子、よく別れずにいてくれたよな。ほとんど会ってなかったのに。連絡さえ。
それまで日記帳には昔の思い出を書くことが多かった。小学生の頃の遠足の話とか、幸子と出会った中学生の頃のこと。デートした喫茶店の思い出。瑞希から結婚の話を聞いて、俺も、少しずつ前を向かなくちゃいけないと思った。いつまでも妹に心配をかける兄じゃいけない。今まで、ゆっくり休むことを許してくれた両親と幸子に恩返しをしなくては。そう考えた俺は、半年前から始めたコンビニのバイトを辞めることにした。再就職することに本腰になろうと決めた。その日からの日記は、今までみたいな過去の回想じゃなく、これからどうしたい、俺が考える理想の結婚生活を送るためにはどうすべきか、俺はどうしたらいいか、何が足りないか、幸子はどうしたいんだろう、なんて趣旨のことが書かれ始めていた。幸子にたいして、ごめんという文字も多かった。ちゃんと働いて、ちゃんとプロポーズする。子供ができても不安にならないような家庭を作る。しっかり働く。今思えば、まるで正月に書く一年の抱負だ。筆をとり考える未来は原動力になった。けれど、その日記も、たった三週間でおしまい。あの日で終わってしまった。三月十一日、日記帳は、俺の生まれた家と共に押しがなされて消えてった。

この場面の効果音に、波の音だけは決して使ってはいけない。
骨壺が入った箱を抱える瑞希が、じっと佇む。

瑞希を振り返る翔平。

翔平　寒いか、瑞希。

同じ年の初夏。夏を思わせる静かな効果音。
翔平は冬服を脱いで、夏の装いとなる。
仮設住宅に椅子を運んでくる幸子。

翔平　それは、そこにお願い。
幸子　うん。

骨壺の入った箱を定位置に置き、幸子が運んだ椅子に座る瑞希。
三人は手を合わせる。

翔平　（瑞希へ）狭いけど、今日からここが俺たちの家だ。
瑞希　ううん。壁で仕切られた個室って、ありがたいね。
翔平　父さんと母さんに、最後の挨拶させてやれなくてごめん。
瑞希　仕方ないでしょ。
翔平　ちゃんとお別れさせてやりたかったのに…。
瑞希　（数度頷く）
翔平　……。
幸子　翔平。
翔平　なんでだろうな、泣けないんだ。引きこもりん頃はバカみたいに涙流してたのに。
幸子　泣かなきゃいけないわけじゃないよ。
翔平　そうかな。
幸子　その人の悲しさを、涙で計るなんておかしいもの。うちから持ってきたストーブも運んできちゃうね。

幸子、退場。

翔平　父さんと母さん。
瑞希　うん。
翔平　車に乗って、どこへ向かってたんだろう。
瑞希　山の方じゃない？
翔平　俺、ハローワーク行ってたじゃん。
瑞希　あ、そうだ。結果どうだったの。

翔平　今さら聞いてどうすんだよ。募集あった会社、いくつも流されてるし。あの時と今じゃ状況が違う。コンビニの親父さんがまた雇ってくれて本当助かったよな。そういえば瑞希。

瑞希　なに。

翔平　お腹空いてないか。

瑞希　（首を横に振る）

翔平　結婚式、残念だったよな。

瑞希　うん。

翔平　棚瀬さんは？

瑞希　すぐに来なくていいって。もう少しお兄ちゃんといる。ねえ、お父さんたちのことだけど。

翔平　うん。

瑞希　お兄ちゃんを迎えに行こうとしてたかも、なんて思わないでいいよ。それは真実かもしれないけど、そのせいでお兄ちゃんが自分を責めたりしたら、二人とも浮かばれないもの。

翔平　頭ではわかる、その理屈。

瑞希　だよね。うすっぺらな言葉だったわ、忘れて。

翔平　なあ、瑞希。

瑞希　なに。

翔平　なあ、瑞希。

瑞希　だからなーに。

翔平　（瑞希を見ている）

瑞希　この仮設って、両隣とも、家族を失った人たちなんだってさ。行政の人が、珍しいって話してるの聞こえたよ。

翔平　（外へ）あのさー。

幸子　（外から）なーにー。

翔平　……。

幸子　（顔を出し）どうかした！？

翔平　ありがとう。

音楽。

翔平　ここの仮設住宅は、比較的海が近くて。避難所では山の方の仮設ができるまで申し込みを待ちたいと話す人もいたけど、俺には瑞希がいる。だからどこでも良いから早く入りたかった。

（コンビニバイト）いらっしゃいませ。こちら温めますか。はい、千円のお預かり

なので、百二十円のお返しです。ありがとうございました。…店長、早いですね。

瑞希　え、夜中の交通整理のバイト？　紹介してくれるんですか？　あ、はい。ありがたいです。俺、免許持ってないから割のいいバイト見つからなくて。助かります。

翔平　ここのバイトに絶対支障出さないようにしますんで。ありがとうございます。

瑞希　お兄ちゃん、コンビニのお弁当ばっかじゃ体調崩しちゃうよ。

翔平　最近、瑞希の顔色が悪い。

瑞希　棚瀬さんから、お母さんの着物に似た花嫁衣裳があったって連絡きたよ。

翔平　家に帰って、明かりが灯っていると安心した。瑞希はたいていテレビを見ている。

瑞希　何週間経っても震災当日の映像が何度も繰り返し流れていた。ただいま。

翔平　おかえり。

瑞希　埃だらけだから、シャワー浴びる。

翔平　うん。今日は晴れだったしね。

瑞希　風もあったから。

翔平　減ってきた？

瑞希　瓦礫？　いや、トラックが運び出すのずーっと眺めてるけど、これって永遠に続くんじゃないかなって思えてくるよ。

翔平　お兄ちゃん、ラッツォクって知ってる？

瑞希　なに。

翔平　ほら、ニュース。ラッツォク焚いてる

瑞希　…ラッツォク。

ト書き3　ニュース画面には、津波によって土台だけになった家の玄関先で、家族を亡くした遺族が迎え火を焚いてる映像が流れていた。古くから伝わる、迎え火や送り火の習慣が、震災を機に復活している。ラッツォクは、お盆に焚くオガラのことで、この地方の方言なのだが、平安時代の蝋燭の読みが「らっちょく」あるいは「らっそく」だったのが転訛したらしい。

翔平　そんな風習あるんだ、知らなかったな。

瑞希　（同意）ねー。素朴で、きれい。…そうかぁ。ああすれば、お父さんやお母さんに会えるんだ。

翔平　……。

瑞希　どうしたの、面白くなさそうな顔して。

翔平　ん。なんだかさ。

瑞希　うん。

翔平　あれ以降、この町だけじゃないけど、被災地がマスコミに解剖されてるみたいで気分悪いんだよ。向こうの話題作りに乗せられてる感じがする。こっちは、それこそ藁にもすがる思いなのに。

瑞希　悪い人たちだけじゃないよ。

翔平　それは分かってる。弁当買ってきた、からあげとハンバーグどっちがいい？

同じ年の冬。

翔平は冬服を着こむ。

ト書き3　夏が終わり、秋になっても、翔平はバイトを続けるだけの毎日を過ごしていた。コンビニのバイトを辞めた。割のいいガレキ処理の交通整備のバイト一本に絞って、延々、運び出されるガレキを眺めて過ごしていた。年末が近づくある日、翔平に伯父から電話がくる。翔平達が住んでいた家を、復興関連事業に伴って市が買い取ってくれるというのだ。

翔平　ラーメン屋、開店する時の借金が丸々残ってるから正直助かりますけど。でも、俺も働いてはいますし、実家がなくなるってのは…。せっかく親の生命保険で住宅ローン払い終えられたし。はい、いや、…分かります。そうですね、あそこにまた家を建てたいってのは現実的じゃないのも、分かってはいるんですけど。はい。被災の手当てにも、今んとこ手をつけずに暮らせてますし。いや、このままずっと仮設で暮らしていけないってのも、分かってはいるんですけど。あの、…はい、分かりました。売って下さい。こういう事、伯父さんにばっか頼ってすみません。ありがとうございます。……はい。大丈夫です。俺は大丈夫です。

翔平は通話を終える。

二〇一二年。

瑞希　（ト書き的に）年が明けた。（翔平へ）お兄ちゃん。

翔平　なんだ。

瑞希　本当に大丈夫？

翔平　瑞希、お前はそんな心配する必要ない。俺が必ずなんとかしてやる。

仮設住宅へ、翔平の夕食を作りに訪れた幸子。スーパーの袋を持ち。

幸子　そうなの、雑誌で連載してる小説。でも半分ノンフィクションなんだって。

翔平　小説読まないからなぁ。

幸子　漫画ばっかりでしょ。

翔平　バイトん時しか読まないけどね。

幸子　自分のお店で立ち読みするの？

翔平　まさか。休憩時間に裏で…。でもそれ以外あんま読まなくなったな。

幸子　売る側になったら興味なくなったって事？

翔平　そうじゃないよ。

幸子　主人公は八十歳のおばあちゃん。認知症でグループホームに入ってる旦那さんのお見舞いと、スーパーマーケットに行くのが日課なの。帰り道、おばあちゃん、清子さんはこうやって腰を伸ばして考えた。最近徐々に腰が真っすぐ伸びなくなってきているような気がする。って。

翔平　タイトルは？

幸子　永久なる湊。

翔平は退場。幸子は清子へと移り変わる。

第三場　永久なる湊

二〇一一年、三月。

清子が一人、腰を伸ばして体を確かめている。

清子　でもまだ杖もカートも必要ないし、老人クラブの仲間の中ではまあまあ丈夫な方ではあるもの。

停まっている車にエンジンを吹かされ、驚く清子。

清子　あぁ、うるせえ車だ、またあそこさいた。あの雷みたいな音にはいつも驚かされっのに、またこの道を通っちまうなんて、私も認知症が始まったんかなぁ。

清子は再びエンジンを吹かされて驚く。

運転手が笑っているように見える。

清子　なんなんだあの運転手は。むぐれてんならまだしも、年寄り驚かせて笑うなんてよ。あぁたまげたな。年寄りだからって肩身の狭い思いをするのはまっぴらだ。私が若かった頃、年寄りってのはもっと堂々と生きてたもんだよ。今はシニア向けのなんとか、可愛いお孫さんへのなんとかって色々あって一見年寄りを大事にしてるように見えっけど、本当は私たち年寄りから金を搾り取ろうって虎視眈々としてるんだから、世の中どうかしてる。けんど…（怒りがおさまり喜びのため息）、うちの子供たちは立派に育ってくれた。うちの人はマグロの船乗りで、六十八で引退するまでずーっと、あれ、六十七だったかしら、やだよ、頭がはっきりすなくって。ともかく家にいることが少なかったから、私一人で、母子家庭

みたいなもんだったのに、本当に真っすぐ育ってくれた。息子は東京、娘は名古屋。二人とも勉強も仕事もがんばって、私なんかよりずっと立派になってくれた。こっからじゃ遠くて寂しい時もあっけど、間違いなく自慢の種だ。うん、そだよ、どんな世の中になろうが、ちゃんとしている人はいつだってちゃんとしてる。さっきの車の男にも親はいるんだ。もし私の息子が年寄り怖がらせて笑ってたら、恥かしくて恥ずかしくて。そう考えたら、私はよほど幸せな人生だよ。テレビのニュースにはよ、なんだこりゃっていう若者もたっくさん出てくんのに、うちの孫たちはそんなもんに全く無縁の真面目な子たちだもんで、それもやっぱり自慢の種だ。…でも、こうやって人様と比べて安心するのも、卑しいことかもしれねえな。

ト書き2　何本かの路地を折れ、通りの先に自宅が見えてくる。清子の足取りは心なしか軽い。今日は楽しみな予定があるからだ。今夜は、長男の一人娘、孫の玲奈から電話がくる。

清子は、スーパーの袋の中身を仕分けする。

ト書き1　昨日の夜、清子の住む地域に震度4の地震があり、津波注意報も発令された。けれど大きな被害はなく、彼女の自宅でも棚の上の物がいくつか落ちた程度で済んだ。それでも久しぶりの大きな地震だったので、心細くあった清子に、最初に電話をかけてきたのが玲奈だった。

回想。昨夜の電話。

玲奈　おばあちゃん？　玲奈だけど、そっち大丈夫だった？

清子　あぁ玲奈かい。揺れたけどね、ばっば元気だよ。大丈夫だ、心配すんね。

玲奈　そっか、よかったー。テレビ見てびっくりしちゃった。

清子　ありがとねえ。

玲奈　あのねおばあちゃん。私、二週間後に大学の卒業式なんだけど、それ終わったらしばらくおばあちゃんに会いに行けなさそうなんだよね。

清子　出版社さんで編集者さんになるんだもんね、仕方ねえよ。

玲奈　出版社に就職したからって、編集者になれるとは限らないんだよ。

清子　頑張り屋のあんだなら、すぐなれっから。働きすぎて、いい人を見つけるのが遅くなるんじゃねえかってばっばは心配してるよ。

玲奈　気が早いよ、おばあちゃん。でね、だから今週末にでも、そっちに遊びに行こうかと思って。

清子　そっかい。

玲奈　うん。でもスケジュールがまだちゃんと決まってないから、確認して明日また電話するね。
清子　無理することねえからな？
玲奈　無理してないよ、おばあちゃんに会いたいんだもん。

電話終了。

ト書き1　三人の孫に優劣をつける気はないのだが、初孫であるのに加え、唯一の女の子なこともあって、玲奈は、清子にとって最も可愛い孫である。こんな風に、清子のことを慕ってくれるものだから、贔屓にしてしまうのも仕方がない。

清子はテレビドラマを見ている。

清子　（『相棒』を見ている）そんな高いとっから紅茶さ淹れて、よぐこぼさねでいられるもんだ。さすがは右京さんだねぇ。

遠くで携帯電話の着信音、清子は気付かない。
再び着信音、気付かない。家の電話が鳴る。

清子　（不機嫌）ここ見逃すと犯人の動機がわかんねぐなんのになぁ。…（ディスプレイに玲奈の名があり、一気に顔がほころび）もしもし、玲奈かい。ばっばだよ。このナンバーディスプレイってのは便利だねぇ。あんだの名前が出っから、ばっば安心して電話とれるよ。
玲奈　やっぱりそうでしょ、送って正解。パパに感謝だね。伝えとくよ。おばあちゃん、変わりない？　大丈夫？
清子　変わりないってば。大丈夫だから心配すんなって昨日も語ったばかりだすべ。
玲奈　だよねー。でもやっぱり心配だから。あ、おばあちゃん携帯どこにあるの？最初そっちにかけたんだけど、さっぱり出ないから家電にかけてみたの。
清子　あれえ、どうしたんだろうねえ…。

清子、あたりを見回す。所在を思い出す。

清子　ああ、布団とこ置きっぱなしだわ。
玲奈　また怒られちゃうよ。パパ、おばあちゃんが危なくないようにって、ＧＰＳつきの携帯買ったんだから。携帯してない携帯電話じゃ意味ないでしょ。
清子　充電器さしたまんま、つい忘れちまうんだ。

玲奈　気持ちはわかるけど。でね、おばあちゃんのところに行く件だけど。
清子　（ドタキャンを恐れ不安そうに）ん。忙しかったら無理することねえからな。
玲奈　明日行くことにしたよ。
清子　明日かい？　昨日の電話で週末って言ってたっけから、明後日の土曜日かと思っていた。
玲奈　日曜日のうちに東京に戻らなくちゃならないの。土曜日に行ったらおばあちゃんちに一泊しかできないでしょ？　せっかく行くのに一泊じゃもったいないし、おばあちゃんともゆっくり話をしたいしさあ。おばあちゃん、明日なにか用事があるの？
清子　いや、何もないけどさ。あざらを作って玲奈に食べさせたいんだけんど、ちょうど塩梅のいい古漬けがうちにないもんでねぇ。明日にでも、どっかから貰ってこさえようと思ってたのっさ。
玲奈　なにも気を使わなくていいよ。
清子　こっちさ着くの、何時ごろになんの？
玲奈　どうしても朝のうちに済ませなくちゃいけない用事があって、あまり早くは出られないの。でも、お昼ごろ仙台に着く新幹線に乗ることにしたから、おばあちゃんちには、二時半くらいには着けると思う。
清子　んだったら大丈夫だ。午前中のうちに材料を揃えられっから
玲奈　無理しなくていいんだよー。
清子　あら、ばっぱのあざら、食いたくねえの？
玲奈　ううん、食べたーい。
清子　んだったら、なんも遠慮することはねがす。
玲奈　えへへ。ありがとう。あざら、楽しみにしてるね。あ、ちょっと待って…ママとかわるね。
清子　（軽く咳払い）
美香　こんばんは、玲奈がお世話になります。本当は私も一緒に行ければいいんですけど、どうしても仕事の都合がつかなくて。
清子　いやいや、美香さん。気にしないでけさい。むしろ、こっちの方が申し訳なくて。
美香　昨日の地震は大丈夫でしたか？　玲奈からご無事を聞いていましたので、あえて電話を差し上げなかったんですけど。
清子　なんも被害はながったっけから、安心してけさい。いろいろ気を遣わせてしまって、かえって申し訳ないです。
美香　申し訳ないなんて、そんな…。ところで、お義父さんの様子はいかがですか。
清子　…今日も面会してきたところだけんど、いつも通りというか、特に変わりはないっけよ。
美香　バイタル面も問題なさそうですか？

清子　（独白）バイ、バイタル…、なんだっけね。（美香へ）問題ないですよ。
美香　例の件ですけど、その後、お考えいただけましたか。
清子　考えてはいるけどねぇ。すぐに結論を出せるような話でもないっけがらさあ。
美香　そうですよねえ。それは十分承知しています。少し先の話になりますけど、ゴールデンウイークの前半に、守さんと一緒にそちらへ行けると思いますので、ゆっくり考えておいて下さいね。
清子　はいはい、わがりすた。

美香と玲奈が電話を交換する。
清子は嫁への態度を反省し、頬を掻いている。

玲奈　じゃあね、おばあちゃん。明日、仙台駅に着いたところで、一度電話するからね。出かける時は、携帯電話をちゃんと持って出かけてね。わかった？
清子　（笑んで）はいはい、わがりすた。

電話終了。じっと佇む清子。
回想。

守　おふくろさぁ、そろそろ冬を越すのが大変になってきたんじゃないの？
清子　まぁ確かにねぇ。
守　さすがに仙河海市と東京では距離があるからさあ。おふくろも年だし、万が一なにかあった時にすぐ動くのは難しいからなあ。おふくろさえよければ、東京のうちのマンションに引っ越してこないか。
清子　あんな狭いところにかい？
守　そりゃあ一戸建てに比べればそうだけど、あの立地のマンションとしてはそこそこ広いほうだし、慣れれば案外快適だと思うよ。それに、玲奈もそろそろ一人暮らしをしたいって言ってるから、今まで玲奈が使ってた部屋を空けられるし。どうだろ？　その方がこっちは安心できるんだけどな。
清子　おじいさんはどうするんだい。仙河海においてくのかい。
守　向こうの施設に移せると思う。
清子　そんなに都合よく空いちゃいないだろ。
守　いや、介護付きの有料老人ホームなら、わりと入居しやすいみたいなんだ。
清子　そのかわり高いんだろ？
守　それはそうだけど、今年からは玲奈の学費も生活費もかからなくなるからね。親父をホームに入れるくらいの費用は、十分に捻出できる。ありがたいことに、うちは定年まで安心していられる共働きだからさ。…おふくろとしては気が進ま

ないのか？

清子　気が進むも進まないも、突然の話だからねぇ。

守　まあ、とりあえず考えといてよ。

清子　はいはい。

再び、佇んで考え込む清子。

ト書き1・2を頼りに、脳内会議を行う。

清子　ここ以外、住んだことねっからな。

ト書き2　今さら、よその土地に住みたいとは思わない。生まれも育ちも仙河海だもの。

清子　でもなぁ。

ト書き1　このままここに頑固に居座っていたら、息子たちに迷惑をかけることになるのではないか。

清子　ん～。

ト書き2　一番理想的なのは、夫を看取ったあとで、自分もある日、心臓発作かなにかでぽっくり逝くという最期なのだけれど。

清子　迷惑かけずに済むからな。

ト書き2　そう都合よくはいかないだろう。遠くはない将来、身体が利かなくなってくる時を考えると、息子夫婦の家に厄介になっていた方が、自分が安心できるのは勿論、息子たちに余計な負担をかけないですむかもしれない。

ト書き1　事実、夫が認知症になってから今のグループホームに落ち着くまで、東京や名古屋と仙河海の往復で、子供たちには大変な思いをさせてしまった。自分の時に同じ迷惑をかけたくない。

清子　もっと玲奈にも会えるしな…。

ト書き1と2は清子を窺う。視線に気づいた清子、二人を見る。

二人はさっと視線を外す。

訝し気な清子、ハッとする。

清子　まさか、明日玲奈がくんの、守の差し金でねえかね！？

「あちゃ～」などとショックを受けている清子。

ト書き2　孫を利用して、母親をその気にさせる計略。ということもあり得ないではない。

息子の守には、そういうところがある。頭がいいだけあって、小さい頃からなかなかの策略家だったのだ。

清子　だとしたら…。
ト書き2　まんまとその手に乗るもんか。
ト書き1　と、意固地になる自分がいる一方。
ト書き2　騙されたフリをしてみるのも悪くないか。
ト書き1　と、考えている自分もいる。
清子　でも私がいねぐなったら、菊田の墓ぁ、誰が守っていくんだ。
ト書き2　夫の兄は戦死し、二人の姉は嫁に行って家を出ている。
清子　私がいなくちゃ。
ト書き2　いや、待てよ。
清子　（ト書き2へ）へ？　なにさ。
ト書き2　もともと自分は菊田家に嫁に入った身である。
清子　そうだよ。
ト書き2　先祖代々の墓に、それほど未練があるわけでもない。
清子　（えー、そうなのかねぇと否定的な態度）
ト書き2　肝心の夫もあの状態なのだから。
清子　…そう言われてみるとねぇ。
ト書き1　定年退職後の守が、仙河海に戻ってくることもありえない。だとすれば、そもそも墓を守っていくこと自体に無理がある。これをいい機会だとして、自分の代で墓を終わらせ、すっかりよそへ移ってしまうのもありではないだろうか。
清子　ご先祖様に申し訳ねえけどな。あら、もうこんな時間だ。せっかく玲奈が来るのに、寝不足で具合悪かったら大変大変…。
ト書き2　寝酒代わりに自家製の梅酒を飲んで、早々に布団に入る清子であった。

清子、一旦退場するが、いそいそと登場し受話器をとる。
翌朝。

清子　あぁ、妙子さん。私、清子だけどね。白菜の古漬け余ってねえかな。孫が来るもんで、あざら作りたいんだわ。あぁ、そか。なんもだよ、またね。…みっちゃん、白菜の古漬け余ってねえかな。孫か来るもんで…、そか。なんもだよ、またね。…えっと、あとは…、定子さん、今日孫が来るもんであざら作りたいんだけど、古漬けきらしてしまっていて。あー、ほんとかい。じゃあ今から取りに行くわ。

『孫がくる自慢』になっていることに、清子気付かず。
受話器を置くと、電話の着信。

清子　玲奈にしちゃ早いよな。…（ディスプレイを見て）グループホーム？

職員　菊田守一さんの奥さんの清子さんですね。
清子　ほでがす。
ト書き2　まさか、夫に、その時がきたのだろうか。
職員　ご自宅の方に、守一さん、お戻りになってはいないでしょうか。
清子　家さ戻ってないですけど、また居ねぐなったんですか？
職員　そうなんです。朝食の時間には、他の入居者と一緒に食事をなさってまして、そのあとはみんなで食堂のテレビを見ず、お一人で自室に戻られたんです。ところが先ほどお部屋を覗いてみたら、どこにもいらっしゃらなくて。どうやら玄関ではなく、自室の窓から外出されてしまったようなんです。
清子　ほですか。
職員　以前も二度、ご自宅に戻られていましたから、今回もそうかと思ったんですが…。こちらも港の付近を中心に探しますので、もしご自宅に戻るようなことがあれば、すぐにご連絡をください。
清子　ご迷惑おかけします。
職員　いえいえ。前に、顔見知りだっていうタクシーの運転手さんへ、奥さんから説明してもらったじゃないですか。確かに、事情を知らないお知り合いだったら、「家」と言われればご自宅まで運んでしまいますよね。でも、もうそんな事もないので、あまり遠くまで行かれてないはずなんですけど。

清子は受話器を置いて、ため息をつく。

清子　なんでこのタイミングなのさ。古漬けもらい損ねちまう…。

清子は携帯を取りに行き、番号をメモにかきつける。

清子　ごめんくださーい。
隣家　はーい。
清子　（メモを渡し）おじいさんが、またグループホーム抜け出したらしいんだわ。私ちょっと探してくっから、もしここらで見かけたら、この番号に電話をかけてもらえねべか。
隣家　あらそれは大変。ご主人見かけたら、とりあえず私の家で待っててもらいますね。
清子　（深々とお辞儀）
ト書き2　こんな風に隣の家に頼み事ができるのは、仙河海だからだ。東京のような都会に住んでいたら、同じようにはいかないだろう。まず清子は、古漬けを取りに定子の家へ向かうことにした。歩いて三十分の距離なので、タクシーを呼ぼうか迷ったが、その道のりの途中には魚市場や、マグロ船がとまっている岸壁がある。

清子　あの人を探しながら、古漬けを貰いにいけばいい。
ト書き2　清子は歩き出した。
ト書き1　夫の認知症がはっきりしたのは、彼が、今の清子と同じ年だった頃だ。物忘れが激しくなってきたなと案じていた夫のことを、明らかに認知症だと清子自身が疑い、そして確信したのは今から五年前。ケアマネージャーの言うことには、一緒に暮らしている配偶者には、徐々に進んでいく相手の認知症に気付けない場合が多いという。守一の場合もそうだった。ある日の夕方、買い物から帰ってきた清子に…。

ト書き1、流れるように守一へと移り変わり。

守一　ちょっと大事な話があるから、そこに座りなさい。
清子　はいはい。
守一　そろそろ白状してもいいのではねか。
清子　白状？　なにをです。
守一　隠さなくてもいいだろ。
清子　隠すってなにをですか。
守一　後ろめたいのは分かるけんど、もういい加減隠すのはやめなさい。
清子　なに言ってるか、さっぱりわがんね。
守一　自分の口から白状したほうが、気も楽になると思うのだがね。
清子　……？
守一　どうしてもシラを切ろうとするのだな。
清子　シラを切るもなにも。
守一　おまえ、男がいるだろう。
清子　へ。
守一　隠れて男と付き合ってるのは、とっくにお見通しなのだ。
清子　あんた、私、いくつだと思ってるんです。

音楽（ト書き2の口笛だと良い）。

清子　あん時はたまげたな。おじいさん、おかしくなったぁ…って、向こうの話を聞くので手一杯で。向こうも向こうで、喋るだけ喋ったら満足して寝ちまったんだもん。
ト書き1　清子は、守一による新手の冗談だったと信じようとしたのだが、翌日も同じように浮気を疑う尋問が始まった。たまらず東京の守に電話した清子に、守は。
守　おふくろ、それ認知症だよ。

清子　認知症…。

ト書き2　守一の場合、清子に手をあげることも、声を荒げることもない穏やかな認知症だったので、最初のは自宅介護を選択した。役所へ行って要介護認定の申請をしたり、嫌がる夫を精神科のある病院に連れていき診断を受けさせたり、ケアマネージャーと相談して介護のプランを作成してもらったりと、どれもこれも自分一人ではお手上げ状態だった。息子と娘が仙河海に通ってきて手続きをしてくれなきゃ、どうなっていただろう。けれど、一年が経つ頃から徘徊が始まり、今のグループホームに入居する事となった。薬を飲んでいても、認知症の進行はとまらない。守一の徘徊が減っている。活動意欲そのものの低下があるようだ。そしてもう一つ、妻の不貞を疑う事がなくなった代わりに、清子を真知子さんと呼ぶようになった。

清子　知ってんだ。おじいさんの初恋相手だってのはさ。

ト書き2　夫の書斎にしまわれていた、遠い昔のラブレター。

清子　ドラマみてえだな。

ト書き2　それからはずっと、真知子さん。

清子　（美人風）はい。

ト書き2　真知子さん。

清子　（過剰な美人風）はいはい。

ト書き2　初恋の人になりすまして会っているようだ。

清子　おもしろくはねえけどな。否定しちゃなんねって言われてっから、仕方ねえ。

ト書き1　結局、魚市場の周辺でも、岸壁でも、守一の姿を見つけられなかった。白菜の古漬けまでもうすぐだ。坂を上る清子の目に、柿の木が映る。そこはかつて守一と清子が暮らしていた、守一の生まれ育った家があった場所だ。柿や梅の木だけが残る崖っぷちの空き地には、転落防止の策が張り巡らされている。

清子　おじいさん。

ト書き2　守一はそこにいた。柿の木のそばでじっと佇み、海を眺めているようだった。

清子　あぁそっか。おじいさんが帰りたかった家ってのは、内の浦の家じゃなく、こっちの方の家だったんだね。

ト書き2　清子は、なるべく守一を驚かせないようそっと近づく。

清子　なんだ、あんだ。ここさ居だったの。

守一　ああ、真知子さん。

　清子は、耳の遠い守一に聞きやすいよう大きく喋る。

清子　なにを見てたのっしゃ。

守一　そろそろ、おどっつぁんと兄やが乗さった船がへえってくる頃なんだがなぁ。

清子　そっかい。
ト書き2　童心に戻り、海を見つめる守一の表情は優しかった。
清子　この人を、この海から引き剥がしちゃなんね。
ト書き2　生涯をかけて仕事場にしてきた海を、好きな時に好きなだけ見させてやりたい。
清子　わりいな、守。まんだ東京さ行けねえわ。
守一　どうしなすった真知子さん。
清子　守一さん。
守一　なにっしゃ。
清子　あざら、久しぶりに食いたくはねがすか？
守一　…あざら、…あざらあざら…。あざら、あんたが作るのすか？
清子　んだすよ。これから古漬けば貰いに行っからさ。定子さんの家さ、守一さんも一緒に行きませんか？
守一　んだな。…清子の作るあざらは天下一品だもんな。

清子、思わず泣き出す。

守一　なじょした清子。なして泣いでっけな。
清子　なんでもねがす。

守一、清子の頬に手をあてる。
清子、その手に自分の手を重ね。

清子　あんたの手、まだ漁師の手だな。
ト書き2　それが清子には、この世で最も大切な宝物のように思えてならなかった。

『永久なる湊』終わり。

第四場　ラッツォク後編

仮設住宅で向かい合う翔平と幸子。隅っこに瑞希が座っている。

幸子　どう？
翔平　いい話なんじゃない。
幸子　なによそれ。私、これ初めて読んだ時、泣いちゃったのに。
翔平　そう？

幸子　朗読とかしてみようかな。
翔平　え？
幸子　ボランティアで。
翔平　歌手だ芸人だって腐るほど来てるのに、素人がそんな事してどうすんの。
幸子　さっきからなんなの？
翔平　……。
幸子　ごはん作るね。
翔平　いいよ。お隣のおばあちゃん（実は清子である）がお裾分けくれるし。
幸子　もらった事ないじゃん。いつも断ってさ、おばあちゃん可哀そう。翔平はしばらく小説とか漫画から離れてるから、人の気持ちとか、感受性が乏しくなってるんだよ。
翔平　感受性？　小説だろうが漫画だろうが、読書してる時間なんてなくなったんだよ。仮設くる前は避難所で、必死んなって漫画探してたけどさ。漫画に集中して、入り込んでなきゃ、どうしようもなくなってたんだよな。雑誌ん中より、目の前の風景のが現実離れしてんのにな。
幸子　ごめん…。
翔平　ううん。悪いけど帰って。
幸子　…そうするね。あ、でも瑞希ちゃんに（手を合わせたい）
瑞希　（幸子の方を向く）
翔平　いいって。
幸子　ごめん。
翔平　いや、なんか責められてる感じしたから。俺の方こそ。
幸子　どうして？　責めてなんかいないよ。
翔平　気がしたんだよ。
幸子　そんなことないよ。
翔平　そんな風に家族のことちゃんと思ってなかったから、俺は。
幸子　……。
翔平　再就職もさ、すぐに動けばいいってわかってたし。親もそれ期待してんのわかるし。けどダラダラ過ごしてたじゃん、俺はさ。だから。
幸子　なに。どういう意味？　全然わかんない。
翔平　もういーよ、帰れよ！
幸子　全然わかんないよ！　なんで？　いいお話だったから、翔平にも読んでもらいたいって思っただけじゃん。責めてなんかいないよ。
翔平　わかったから。
幸子　わかんないよ！
翔平　わかるわけねーよ！

瑞希　（体育座りで顔を隠している）
翔平　…瑞希の前で、なんだよこれ。

幸子は家を出ていく。

翔平　ごめんな、瑞希。
瑞希　ううん、大丈夫。
翔平　疲れてんだ、きっと。
瑞希　…。
翔平　バイトしてても、将来見えてこないしな。
瑞希　……。
翔平　飯、どうする。
瑞希　いらない。お兄ちゃんは食べなよ、お隣のお裾分けはもらわないだろうけど。
翔平　コンビニ買いに行くのも面倒だ。
瑞希　作ろうか。さっちゃん、なににするつもりだったのかな…。
翔平　ラーメンではないな。
瑞希　そうだね。そんな無神経を、さっちゃんがするわけない。
翔平　…。
瑞希　追いかけたら？

翔平、急いで幸子を追いかける。が、すぐ戻り。

翔平　先に飯、食っといていいからな！（再び退場）
瑞希　（少し笑み）だから食べないって。

スーパーの袋を片付ける瑞希。
瑞希が語る間に仲良く戻る翔平と幸子だが、語りの内に距離ができ。

瑞希　…年が明けて一月。二月。もうすぐ一年だ、三月十一日、あの日がくるね。と、心では思っていながら、お兄ちゃんも私も口に出すことはありませんでした。もう一度あの日を迎えるのが怖かったし、一年、二年と月日を重ね、忘れてしまう事が嫌だったのだと思います。勿論、起こった出来事を忘れるわけはありません。でも、胸に受けた衝撃を、悲しみを、生々しく思い返せなくなってしまうのが、嫌だったのです。
幸子　もうすぐ一年だね。
翔平　……。

幸子　翔平？
翔平　…で？
幸子　私の手伝ってるＮＰＯが、あの日に向けてイベントを企画してて。
翔平　へえ。
幸子　高校生ラジオとコラボしたり、地元の人たちとボランティアが団結してさ、より絆を深めようって。いいアイディアでしょ？　それに東京の方からも取材がくるの。翔平も一緒にやらない？
翔平　そんな暇ねえって。
幸子　アルバイト忙しいか。
翔平　いや、そんなままごとみたいな事してられっかよ。そんな暇があったら、バイト増やした方がよっぽどマシだ。
幸子　…最近、ちょっと心が荒み過ぎじゃない？　私、待ってたんだよ。翔平が立ち直る時を。仕事辞めた時から、ずっと。きっと翔平は一人でいるの向いてないんだと思うんだ。だから、ボランティアのみんなと一緒にやってみれば、きっと。
翔平　（遮り）偉いねー。
幸子　偉い？
翔平　なんか、まっとうな事して、町の役に立ってますって感じが？
幸子　ちょっと。
翔平　みんなで手を繋いで復興頑張りましょう！って、偉いじゃん。さすがボランティアはボランティア精神に溢れてるなぁ〜、俺にはそんな偽善者みたいな真似できないもん。
幸子　なにその言い方。翔平だってボランティアの人にお世話になったじゃん。
翔平　うん、お世話していただいたよ。でもだからって、いつまでもボランティアの機嫌取りする必要はないよな？　平和なとこから手を差し伸べて、恵んでくれてる感じ、俺ら乞食じゃねーぞってさ。結局あいつらも寄付金とか助成金が目当てなんじゃねえの？　そのカネこっちに恵んでほしいよ。このままじゃ被災地は奴らの食い物にされるだけ…。
幸子　（遮り）いい加減にして！
翔平　お前だってそうだよ。お前んち床下浸水だけで、一週間後には普通に暮らせてたじゃん。心が荒み過ぎ？　荒んでたの幸子だろ、なのに離婚するとか仮面夫婦で大っ嫌いとか言ってた両親も、震災が起こったおかげでヨリ戻ししたんだろ？　幸せ家族に戻ってよかったよなぁ？　幸子もボランティア活動で派遣のストレス発散できてさ、良かったなぁ、幸子にとっちゃ震災様様だ！

幸子、翔平を平手打ちする。

幸子　そこまで捻くれたんならもう無理、一緒にいられる自信がない。
翔平　ついて来て下さいって、お願いしたことあったっけ？
幸子　…可哀そう。
翔平　そうだよ、可哀そうなんだよ。俺、被災者だから。
幸子　違うよ、おじさんやおばさん、瑞希ちゃんが可哀そう！
翔平　知ったようなこと言うな！
幸子　もう終わりだね。
翔平　…え、幸子さ、俺のこと振るの？　今、俺と別れたら世間体悪くない？

幸子、もう一度翔平を平手打ちしようと。翔平、逃げ転ぶ。

幸子　私が耐えられないの！

幸子が退場する。
しばらくして、立ち上がり家の外を見る翔平。
外には、ランニング前の準備運動をする希がいる。

翔平　あ、ども。
希　若いね。
翔平　え？
希　怒鳴り合い、声、仮設中に響いたんじゃない？
翔平　あ…、すみません。
希　わかるけどね。あんたの気持ちも。だってさ、ほんと今じゃボランティアも、なんだかなぁって思うことあるもん。仮設に入ってくるマスコミってデリカシーないし、支援物資の洋服だって今じゃ古着バザーみたいになってるし。ありがたいんだけど、選り好みしちゃうよ。選べるだけ復興したって事なんだろうけどさ。

駆けだしていく希。
見送る翔平は、幸子を追いかけるのをやめて家へ戻る。

翔平　なにやってんだろな、俺…。

夏を思わせる音。

瑞希　あれから二度目の夏が来た。お兄ちゃんは、ガレキ処理の交通整備を続けている。
翔平　そうだ。今年から、みなと祭が復活するんだって。瑞希知ってた？

瑞希　知らなかった。いつあるの？
翔平　今度の土日。
瑞希　あれ。今度の土日って二週目だよね。仙河海みなと祭って、八月最初の土日じゃなかったっけ？
翔平　今年は月命日に合わせて実施することになったんだって。
瑞希　さすがに去年はできなかったしね。
翔平　土曜まではバイトだけど、日曜からお盆までは休みなんだ。一緒に行ってみるか？
瑞希　お兄ちゃんと二人で？
翔平　ああ。
瑞希　んー、いや、いいよ別に。
翔平　土曜日のバイト終わりでもいいぞ、早めに上がれるはずだから。うん、灯篭流しや花火は土曜日になるみたいだし。
瑞希　…。
翔平　どうだ。
瑞希　やっぱりいいや。行きたかったら、お兄ちゃんさっちゃんと行って来なよ。
翔平　あぁ…、幸子は…。
瑞希　最近来てくれないのは、そういう理由か。
翔平　…うん。
瑞希　バイトし過ぎじゃない？
翔平　バイトだけしててもしょうがないって、幸子にも言われた。でも俺には目先の金が必要だったろ。生きてくためにさ。いつか保険は下りるだろうし、国から保障だってあるはずだ、でもこの先の不安を埋めるのには足りなかった。
瑞希　あの時は、そうだったね。
翔平　うん。
瑞希　でも。
翔平　今も続けてるのは、なんでだろうな。俺が埋めたかった不安て、財布の中の話じゃなくて、（胸をおさえ）ここの不安の穴埋めしてたのかな。全部流されてったんだもん。これからも、毎日ずっと続いていくと思っていた日常。全部さ。
瑞希　そうだ、お兄ちゃん。
翔平　なに。
瑞希　今年はうちでもラッツォク焚こうよ。
翔平　どこで。
瑞希　うちしかないでしょ、私たちの家。
翔平　ここじゃなくて、内の浦の？
瑞希　うん。ねえ、ラッツォク焚こうよぉ。

翔平　うちがあった辺り、いまだに街頭一つないからなぁ。
瑞希　夕方、暗くなる前に焚けばいいじゃん。
翔平　それでも帰りは真っ暗になるよ。
瑞希　懐中電灯持っていけば大丈夫だよ。
翔平　それはそうだけど。
瑞希　嫌なの？
翔平　…。
瑞希　じゃあ、また来年。
翔平　焚こうか。ラッツォク。
瑞希　…。
翔平　焚こう、二人で。

音楽。
海岸。瑞希が向こうを眺める。翔平がラッツォクを持ち出す。
二人は、自宅のあった場所まで歩く。

瑞希　それ、どこで買ったの？
翔平　お裾分けのばあちゃんから貰った。このこと話したら「兄さんの分も買っどくから心配すんな」ってさ。今日は天気がよくてよかったな。こないだは、途中で小雨が降りだしてきちゃったから。
瑞希　うん。
翔平　ヘドロの臭い、消えないな。でも去年の夏よりマシか。
瑞希　うん。…こないだのが迎え火で、今日のが送り火。
翔平　ああ。父さんと母さん、迷わず来れたのかな。
瑞希　来てるよ。
翔平　…なら、よかった。
瑞希　だから、これを焚いたら私も行くね。
翔平　……。
瑞希　送り火のラッツォクを焚いたら、私が向こうへ行くの知ってたでしょ。
翔平　ああ。
瑞希　焚いてくれてありがとう。
翔平　いつまでも瑞希を引きとめて、ごめんな。
瑞希　（首を横に振って）お兄ちゃんのこと、心配だったんだ。
翔平　いつまでも心配かけて、ごめんな。
瑞希　最後に二つお願いがあるの。
翔平　なに。

瑞希　私の遺体が見つからなくても、お父さんとお母さんをお墓に入れてあげて。
翔平　わかった。今度伯父さんと相談する。もう一つは？
瑞希　幸子さんと、また仲直りして。
翔平　それはどうかな。俺、あいつに散々なこと言ったし。
瑞希　…じゃあ電話だけでもして。
翔平　ああ。
瑞希　絶対だよ。
翔平　わかったって。…出てくれなかったら、留守電だけ残す。
瑞希　（呆れ）弱気。
翔平　嘘だよ、わかった。ちゃんとやってみるから。うん。
瑞希　引き際も大事だからね。
翔平　どっちだよ。…棚瀬さんにも、謝っといてな。
瑞希　うん。新婚楽しむわ。
翔平　そうだな。
瑞希　じゃあね、お兄ちゃん。また来年、お父さんとお母さんと一緒に戻ってくるね。

二人は、自宅のあった場所で歩みをとめる。

翔平　またここで、ラッツォク焚いて待ってる。

瑞希と翔平はラッツォクを焚く。
煙がのぼり、瑞希は姿を消す。
ラッツォクを焚き終わった翔平、電話をかける。

翔平　もしもし。幸子？　…あ、ありがとう。うん、いや…。あのさ…。うん、こちらこそごめん。それと。

泣き出す翔平。

翔平　話したいことがたくさんあるんだ。たくさん。

ラッツォクの灯が消えると、夜空の星が見えてくる。
小さな星々は静かに輝き続ける。

終わり